The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ドイモイ期ベトナムに北部におけるゾンホの活動の復興について ： バクニン省の事例を中心に
Author(s)	住村, 欣範
Citation	アジア太平洋論叢. 2001, 11, p. 63-82
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99962
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ドイモイ期ベトナムに北部におけるゾンホの活動の復興について
－バクニン省の事例を中心に－

住　村　欣　範*

はじめに

本論は、ドイモイ政策（刷新政策）の開始以降から急速に進展した、ベトナムの最大民族集団キン族の父系血縁集団ゾンホ（dòng họ）の活動の復興についての論考である。

1950年代前半から始まる本格的な社会主義建設の過程で否定的に見なされてきた革命以前の農村の文化は、ドイモイ政策の開始以降その一部が民族の「伝統（truyền thống）」として復活してきている[1]。それらの文化の復興は基本的に革命以前の文化の形式を用いてはいるが、農村を取り巻く政治・社会・経済の状況が根本的に変化している以上、その内容は必ずしも以前の文化がそのまま復活したものではない。1990年代に活発化しているゾンホの活動の復興もそのような潮流に沿うものの一つに挙げられるが、ゾンホに隣接する家族や村落の文化の復興の展開とはまたさらに違った面も持っている。

筆者は1998年から1999年にかけて、ハノイから北東に35ｋｍほどのところにあるバクニン省ティェンヅゥ県（調査時はティェンソン県）のカックニェム社で、一年余りの間フィールドワークを行った。本論では、まず、家族、ゾンホ、村落のそれぞれの違いを明らかし、これまで、家族と村落の狭間にあって明確な輪郭を与えられてこなかった印象をもつゾンホのレベルで進展している事態について、バクニン省の事例を中心に、筆者が収集した事例も含めて考察を行うものである。

＊大阪外国語大学　アジアⅡ講座

なお、本論が扱う問題についてベトナムの北部と南部では大きく異なる歴史的経緯をたどってきているため、本論の内容の一般化の可能性はベトナム北部に限られるものであることをお断りしておく。

1. ゾンホの概略と1950年代以降のベトナム北部の文化状況におけるその特殊性

まず初めに、本論が対象とするゾンホの概略と20世紀後半のベトナム北部の文化状況におけるその特色についてまとめておく。

ゾンホは父系血縁集団であり、原則として外婚制をとる。母系の親族とは明確に区別され、ゾンホの内部では世代・年齢の上下・性によって規定される秩序を持ち、それぞれ親族呼称に反映されている。ゾンホという言葉を構成する二つの部分のうち、ゾン(dòng) は「流れ」を意味する言葉であり、ゾンホがリニージであることを明確に示している。ゾンホからゾンを除いたホ (họ) という言葉はゾンホが共有する姓を示す言葉でゾンホと同義に使われることが多いが、傍の親族を指して使われる場合もありその区別は厳密ではない。

この他にも親族関係の用語には用法が部分的に重なり合うものが多いが、本論ではそれぞれの概念の中心的意味にしたがって父系血縁集団に「ゾンホ」、父系と母系を特に区別しないホハン(họ hàng)に「親族」、同居家族員と他出家族員を含みうる核家族を中心とした集団であるザーディン(gia đình)という概念に「家族」という言葉をそれぞれあてて使うこととする。また、すでに使用している「ゾンホの活動」という言葉は、ヴィェックホ (việc họ)というベトナム語の訳である。

このゾンホとその構成員となる個人の間には、ガィン(ngành)あるいはチー(chi)と呼ばれる下位リネージ[2]と家族がある。ゾンホ、ガィン、家族はそれぞれ長を持ち、男子のうちの最年長者が代々継承していく。それぞれの長の最も重要な役割は祖先祭祀の維持であり、毎年共通の祖先の命日にそれぞれのレベルの長が中心となって祖先祭祀の儀礼を行う。

革命前のゾンホは、祖先祭祀を行うための祠堂や祭祀の費用を賄うための香火田を持ち、また、系譜関係を明確にするために家譜(gia phả)を作成することが多く、ゾンホの長である族長(tộc trưởng)はそれらを維持・管理する責任を持っていた。さ

らに、ゾンホの親族構造や祖先祭祀は16世紀以降農村部にも浸透した儒教と深く結びついていた。儒教は村落において優勢な道徳規範となり、ベトナムの人生儀礼の骨格にも多大の影響を与えたのである。

また、ゾンホはまた同居や経済生産の単位となる家族を包摂する一方で、革命以前にはゾンホの有力者が村落レベルでの指導者層を構成することが多かった。このような性格をもつゾンホは、村落社会の最小単位から最大単位までを媒介する政治力を持ち、村落社会の紐帯を形成するのに非常に重要な集団であったということができる。

ところで、1950年代以降ベトナムの農村部において党＝国家の主導の下に行われた改革は、家族－ゾンホ－村落と連なる社会単位のそれぞれのレベルに様々な影響を及ぼした。

家族に対しては、「社会主義的家族」を建設することを目的として、社会主義的価値の宣伝、結婚家族法の制定、女性の解放などが推進される一方、経済的な側面では、土地改革による私有地の没収、合作社による集団化などが行われ、文化・経済の両面における基本単位としての家族の性格は、国家の政策により大きな変革を受けた。

また、村落のレベルでも、政治機構が合作社を中心としたものに改変され、さらには、村の守護神である城隍神を祀り村の合議が行われる革命以前の村の宗教と政治的機能を統合する場であったディンを、国家と社会主義と生産のための文化的活動を行うことを目的とした「文化の家(nhà văn hóa)」に置き換える運動が文化省の主導の下に行われるなどし[3]、従来の文化的基盤の多くがそぎとられた。

そして、家族と村落と同様、その改革の潮流はゾンホに対しても大きな影響を与えた。まず、経済的な改革からの影響としては、50年代の土地改革によって香火田が没収され、それに続く60年代の合作社の形成によって家族に属する私有地とそこで親族関係を中心に交換される労働のあり方はほぼ消滅し、これに伴い親族間の互助関係も大幅に弱体化した。また、宗教的な面では祖先祭祀のための祭壇は破壊されることはなかったが、祭壇を簡素化するなどの社会的な圧力がかけられることとなった[4]。

しかし、基本的には私有地の没収や集団化は生産単位としての家族の解体を狙っ

たものであり、宗教を含む経済以外の面でも特にゾンホや祖先祭祀そのものを対象とした議決や指示は出されなかった[5]。文化に対する社会主義的改革が始まって以降、ゾンホは家族と村落という他の二つの社会単位とは異なる特殊な扱いを受けてきたようである。

これは、それぞれ生産単位としての機能と政治単位としての明確な機能をもつ家族と村落に比べて、ゾンホはあくまで理念を体現し他の社会単位を媒介する集団としての性格が強く、社会主義建設が行われていた時代のベトナムの言語の枠組みそのものに沿わない対象化されにくい概念であったこと。そして、祖先崇拝がベトナム人の生にとってあまりに根底的であり、また宗教としての対象化も行いにくいためにこれに直接手をつけるのが憚られたということが考えられる。

このような家族と村落の狭間にあるものとしてのゾンホの特殊性は、ドイモイ以降も継承されていく。1975年に統一が行われて以降、農村では「新しい文化的生」を建設する運動が推進される。この運動では、医療・教育・体育などの整備に重点が置かれており、依然として近代化への志向が基本になっている[6]。しかし、現在文化政策において最もよく使われている標語「先進的で民族の本性にあふれた文化の建設」に見られるように、ドイモイ以降は近代化に加えて民族文化に対する志向が加わる。統一まで侵略に抗する意味合いの強かった民族主義は、その内実を問い直されることとなったのである。

1993年の共産党第七期第五回中央委員会総会では、農村社会政策として以下のものが挙げられている。

> 文盲の一掃、初等教育の普及、民知の向上。農村における伝達システム、テレビ、図書館、文化の家の拡充。衛生予防の運動の促進、家族計画化の実現、体育スポーツを広める運動を広く開始すること、すばらしい文化的伝統、淳風美俗の発揮、腐俗、迷信、異端、社会的害悪の排除、村落共同体精神の発揮、農村の団結の保持。村や社における文明的な生についての郷約や規定の作成と実現に対する奨励[7]。

この議決は、ドイモイ以前から推進されてきた農村の近代化を志向する要素と悪

習や迷信の廃絶することに加え、伝統の保持が強調され村の成文法である郷約作成の奨励がはじめて政策として盛り込まれた点に特徴がある。文化政策のこのような変化の背景には個人主義の普及や経済的格差の増大への危機感を背景に、共同体を維持しようとする国家の意図が読み取れる。

農村文化政策の内容はまた、より個別的な「文化的家族」「文化的村」という二つの対象を建設する運動の中に反映されている。「文化的家族」を建設する運動は、1960年代に源を持ち、統一以降国家の公認を得て現在に至るまで引き続き推進されているものだが、1990年代に入ってからは近代化の要素に加え文化的再生産を行い社会化機能を担う場としての家族の役割が特に強調されるようになっている。

これに対しゾンホは、統一以降ドイモイの開始を経て90年代に至るまでも5・60年代と同様、「文化的村」や「文化的家族」のような国家レベルで推進される運動の直接の対象とはなっておらず、ゾンホを対象にした党や政府の議決指示も出されていない。

50年代の土地改革と60年代の集団化という社会－経済的面での政策が、ゾンホのあり方にも間接的な影響を与えたことは先に述べたが、ドイモイ以降におけるゾンホの活動の復興の場合にもこれと同様の視点から説明がなされることが多い。

古田は、1981年の生産請負制の導入から農家世帯を基本的な経営主体として位置づける1988年のいわゆる「第十号決議」に至る過程で、生産における家族の意味が復活し、家族のルーツ探しが活発化したとする[8]。そして、ベトナム国内外の多くの学者の多くが、この生産単位としての家族の復活を、ゾンホという別のレベルの活動の復興を説明する際にも用いるのである[9]。

確かに、経営主体としての家族の復活を背景に、労働力のやり取りなどの互助関係を通してゾンホのネットワークが個々の家族間で修復されていることは考えられる。また、ゾンホの活動の復活の条件として、その構成単位である個々の家族のレベルでの系譜を認識することへの欲求の高まりというものが重要なのも理解できる。しかし、それらの個々の家族の活動がどのように親族全体の活動につながるのかは必ずしも明らかではない。

ドイモイ以降行われているゾンホの活動の復興を最も特徴づけるのは、むしろ人生儀礼におけるゾンホの役割の増大、家譜や族訓の再編纂、そして始祖に対する祖

先祭祀の活性化など、ゾンホ全体に関わるものである。このようなゾンホの活動の復興は、日本の研究者が折に触れて言及してきたアイデンティティの問題にも深く関わるものであると思われる[10]。

また、家族やムラと異なり文化政策や経済政策に直接的に還元されないゾンホの活動の復興は、ベトナムの農村部における民衆のアイデンティティの再構築のより自主的な側面を観察する上でも格好の対象だもといえる。

以下の部分では、ゾンホの活動の復活の背景にある農業主体の変化にとどまらないより大きな潮流と、また個々の家族がゾンホに纏め上げられる過程に行われている調停についてバクニン省の事例を中心に考察することとする。

2. 韓国におけるリー李朝の末裔の帰郷

政策上の明確な対象とならないゾンホという範疇にとって、それを取り巻く90年代のベトナムの文化についての大きな潮流を象徴的するような出来事があった。韓国に亡命したリー朝の末裔の七百数十年ぶりの帰郷である。

ベトナムの歴史上初の本格王朝で11世紀はじめに起こったリー朝は、13世紀初頭に外戚となったチャン氏に王位を簒奪される。このとき、6代目英宗の次男であるリー・ロン・トゥォンは、高麗に渡り難を逃れた。高麗がモンゴルに攻められた1253年に彼は高麗のためにこれと戦い勝利した(しばらく後にはベトナムのチャン朝のチャン・フン・ダオが同じくモンゴルを退け現在も国民的英雄となっている)ので、朝廷により爵位と封土を与えられた。また、生前は彼の功を記した碑が、死後は彼の一族と高麗人の手によって彼を祀る廟が建てられた。以後、彼は朝鮮の人々にも長く敬愛されることとなったということである。

彼は現地の女性と結婚して子を残したが、子孫たちも歴代王朝で功を立て重用された。リー氏のゾンホは、700年以上の間代々ゾンホの中から顧問を立てゾンホの過去の記憶と伝統を維持継承していった。20世紀に入りリー氏の多くの人々が日本の植民地支配に抵抗する運動に参加したため、韓国人は「美しい河」という名のもう一つの記念碑を建て朝鮮の国家防衛に貢献したリー氏を称えた[11]。

そして、現在の韓国におけるリー・ロン・トゥォンの末裔でゾンホの族長を務めるリー・スォン・カン氏は、韓国との正式国交が回復して間もない1994年にベトナムに帰郷し、リー朝八帝を祀るバクニン省のデンドーを訪れて参拝を果たしたのである。

この出来事は全国紙やテレビで報道されただけでなく、多くの学者・教師などの知識人がそれぞれの立場から見解を発表した[12]。また、翌95年からは、当時のドォ・ムォィ書記長をはじめとする党や国の高官たちのデンドーへの公式参拝が相次ぐなど、全国レベルで非常に大きな関心を呼んだのである。

ドォ・ムォィ氏は、93年からハノイのチャンコック寺やカソリック大聖堂を公式参拝しており、宗教に対する寛容な態度を見せるようになっていた。デンドーへの参拝も一応この流れの中に位置付けることができるが、その背景には単なる宗教政策の柔軟化以上のものがある。

1995年の１月27日に行われた演説で、ドォ・ムォィ氏はベトナム初の長期安定王朝であったリー朝の各王が、「人民と共に大越を建設して何代もの子孫たちのために計画を立て、農業や手工業を発展させ、ヴァンドンの港を開き、民知を高め、法を重視し、わが国初の大学である国子監を建て、外国の侵略に勝利して祖国を確りと守った[13]。」として称揚している。ドォ・ムォィ氏のデンドーに対する態度の基本は、まず第一に国家建設と防衛に寄与した点を評価し現代につなげるというものであると言える。

リー・ロン・トゥォンの物語も、朝鮮半島で繰り広げられたものであるが、内容的にはドォ・ムォィ氏の評価に沿うものである。しかし、その物語はさらに1990年代のベトナムの文化状況についてさらに二つの重要な点を象徴している意味で非常に意味の大きなものとなっている。

第一に、700年以上にわたって故国を思いつづけてきた韓国のリー氏の姿は、良い「伝統」を代々継承させるものとしてのゾンホの役割を示すのに格好の例であった。第二に、それはベトナム戦争時代はアメリカ側に立って直接参戦した韓国との交流が復活し、国際交流の分野において語られる物語の素材がかつての社会主義圏からアジアという地域の歴史・文化へと変化したことを如実に示すものであった。韓国のリー氏の末裔の帰郷は、これらのことを大衆に直観的に反感を生まない形で示

す格好の素材であったといえる。

そして、本論との関係において特に重要なのは、韓国のリー氏の「国家の防衛・建設者」としての面と、ゾンホの「伝統の継承を担うもの」としての面の強調である。筆者は、この二つの面の巧妙な組み合わせこそが、ドイモイ以降のベトナム社会に広く流通可能なゾンホのあり方を生み出し、ゾンホの復活の一つの背景になっているように考える。

3．カックニェム社におけるゾンホの活動の復興

リー氏の末裔の帰郷の出来事は、王朝とは直接無縁の一般のゾンホの活動の復興にも影響を及ぼした。筆者が住み込み調査を行ったカックニェム社では、旧家の一つが家譜を調べなおし、家系がリー氏にさかのぼれることを証明したが、筆者が調査を開始したときには社の老人たちの間でこのことは広く知れ渡っていた。そして、必ずしも始祖の経歴について明確な知識を持っていないカックニェム社内の他のゾンホでも、リー氏へのつながりがまことしやかに語られるようになっていたのである。

しかし、カックニェム社では、自らの系譜を6世代以上に渡って明確にたどれる例は必ずしも一般的とは言えない。筆者が住み込んでいたドン村には8つの主要ゾンホがあり、そのうち革命以前の家譜でゾンホ全体についてのまとまった情報をもつものを持つのは1つのゾンホのみであった。現存している革命以前の家譜がほとんどないことについては、かつてフランス軍の根拠地があった場所に程近く、1950年代にフランス軍によって村が4回も焼かれたためだとの説明が複数のゾンホによってなされていた[14]。

現在2つのゾンホで家譜の再編が行われているが、そのうちドン村で最大の成員数を持つゾンホの家譜は、ゾンホに属するただ一人の老人が聞き取りを行って個人的に編纂したものである。また、ドン村で第2の成員数を持つもう一つのゾンホでは、新しい家譜の編纂をゾンホぐるみで行った。しかし、いずれの場合も「失われた」家譜がどのような内容をもち誰が保持していたのかなどの記憶もほとんど持ち

合わせておらず、ゾンホの成員たちのあいまいな系譜についての記憶のみに頼っているために、系譜関係を記した暫定的な家系図の作成にしか至っていないのが現状であった。

また、この村の最大ゾンホの支族の一つでは、家譜を持っていた家族が土地改革期に富農と見なされたために家譜は没収されたとのことである。そして、家譜を失った７つのゾンホのうち２つの大きなゾンホは、村に残る寺の改修の碑文にのる名から見て改姓が行われた形跡があり、20世紀の前半にゾンホに大きな変動があったことをうかがわせる。ゾンホの系譜をさかのぼるには、家族間の差異が強力に意識化され問題化された時代の記憶をも掘り起こさなくてはならず、このことも正確な系譜関係の把握が容易に進まない原因の一つになっているのかも知れない。

家譜の編纂が難しいこのような状況にあって、ドン村の各ゾンホで最も活発になったのは、ゾォホと呼ばれるゾンホの始祖の命日である。始祖の来歴についての正確な記憶も多くのゾンホで失われてしまっているが、始祖の命日だけは８つのゾンホすべてが記憶しており、毎年始祖の命日が行われていた。

筆者が調査を行った時点で新しい家譜の再編が最も進行していたドン村の２番目の大きさのゾンホは、1995年の陰暦の２月末に会合を行い、以後始祖の命日をどのように執り行うかを話し合った。そして、1995年を初めに５年に一度ゾンホの老若男女全ての成員を旧暦３月１日の始祖の命日に招く大々的な催し、また毎年各家族の代表を招く通常の命日を行うことを「議決」している。

ゾォホは、ゾンホ全体にとって共通な一つの情報しか必要としないものであるために容易に維持しやすい活動である。カックニェム社では、様々な形でゾンホの復興への努力が見られるが、ドン村のゾンホでは各家族レベルでの系譜の探求は必ずしも容易ではなく、むしろ、ゾォホに見られるようなゾンホ全体でのアイデンティティ構築の過程の方が先行する場合もあることが分かる。家譜の作成のような厳密な記憶の再構成を行うには、記憶を掘り起こすだけでなく、過去と現在における家族間の差異を調停する作業が不可欠なのである。

また、始祖の命日についての「議決」を行ったドン村の第二のゾンホでは、その議決の文書の冒頭には「ベトナム社会主義共和国　独立―自由―幸福」と書かれるなど公文書の一般的な形式が用いられ、また始祖を初めとするゾンホの祖先たちの墓

もホーチミン廟を模したものとなっている。

ドン村のような革命以前の文化についての記憶があいまいで、遺物もほとんど残っていない例は、むしろ現在のベトナムにおいて一般的であると思われる。ゾンホの活動における国家に纏わる形式の採用は、そのような村では、失われた過去の文化の権威の埋め合わせをするために新しい形式が採用されることがあることを示す例である。

そのゾンホの族長は当時カックニェム社の主席で、成員の中にはドン村の村長を務める元専門学校の政治教師や村の老人会の副会長などがおり、新しい形式がゾンホの活動に積極的に取り入れられえていった背景は容易に推察できる。このゾンホにおいては、そのアイデンティティを示すものとして社会主義建設以降の国家に纏わる形式が最も似つかわしいものであったのである。

1990年代、王朝の末裔とゾンホの古い記憶の多くを失った村のゾンホという二つの極の間で、多くのゾンホがそれぞれの条件でその活動を復興していた。その復興の過程は多かれ少なかれ当時の社会状況を反映したものとなっているはずである。しかし、ドン村の第二のゾンホに見られた新たな形式の採用は、「伝統」を復活させている人々が戦略的にとりうる対応の例として一般的なものだと筆者は考える。次に、そのような戦略のより典型的なものの一つとして、ドン村の隣のドァイ村のゾンホで行われた新しい家譜の編纂を例を見てみることとする。

4. 家譜に見るゾンホのアイデンティティ構築の例

ドン村に隣接して存在しているドァイ村は、フランス軍が使うこの地域の主要道路からドン村と比べて僅かばかり離れていたために、革命以前のゾンホの遺物の残存状況がドン村よりは良好である。このドァイ村で最も大きな二つのゾンホには、漢字と字喃(漢字を元にしたベトナム独自の文字)で書かれた家譜が残っていた。

この二つのゾンホのうちの一つND族では、1993年に、ローマ字で書かれた新しい家譜が再編された。この新しい家譜を再編することになったきっかけは、先代の族長が1992年に亡くなる前に残した遺言である。先代の族長の弟によれば、亡く

なった族長は19世紀末以来ゾンホ全体の家譜が編纂されることのなかったにも関わらず、ゾンホ成員が急速に肥大したため、系譜関係を明らかにすることとゾンホ全体の団結を作り直すことを望み、各支族の長を中心とする同世代の長老たちに家譜を編纂しなおすよう頼んだということである。

現在この新しい家譜は製本され、一部は族長の家の祖先を祀る祭壇の上に「一族のものが見たいときに見ることができるように」ガラスケースに入れて置き、もう一部を支族長が管理している。

この新しい家譜は五つの部分からなっている。まず、始祖から始まり編纂当時に成人している者を含むもっとも新しい世代である第九世代までの事跡について記されている序文。次に、女性を含む成員の名前、それらの成員間の親子関係、婚姻関係、兄弟間の年齢の上下、誕生日と命日についての情報を記載する系譜関係が書かれた最も大部で中心となる部分。そして、一族の従軍者・学歴・行政幹部などの数がまとめられた「一族小史」とされた部分(付表を参照のこと)。家譜編纂の経緯が書かれたあとがき。最後に編集員の名簿である。以下、1990年代においてゾンホがもつ意味の一側面をもっともよく体現していると思われる序文を中心に分析を進めることとする。

序文の冒頭で述べられているのはＮＤ族の始祖の来歴とドァイ村に定住するまでの過程である。ＮＤ族の始祖は、もともとタィンホァに住む儒者であった。「国を愛する心ゆえ、道理(công lý)に従って戦い」、土地の役人と反目し17世紀の初めに故郷を離れることとなり、妻と４人の子供と共に現在のドァイ村の地に流れ着いた。彼は、村で漢学教師をするかたわら、妻や子供を指導して開墾を行い生計をたてた。そして、次第に豊かになり村人たちの信頼を得て代々村に定住するに至った。

４人の子供たちはそれぞれ成長したが、儒教の教育を受けた次男は革命に参加したため役人に追われることとなった。捕縛の命は三世代に渡ったため、次男は遠く離れたカットバァ島に逃れそこで一族を形成した。19世紀末にその次男の末裔がドァイ村を訪れたことがあったが、再び音信不通となった。始祖は、1695年の陰暦の９月26日に亡くなり、長男がドァイ村のＮＤ族の族長となった。

続く第三世代から第五世代についての部分の記述はごく簡単なものである。この世代も「ゾンホの伝統を発揮」し、耆豪や郷里など村落レベルでの役職についたも

のがいたことが記されている[15]。

そして、次の第六世代は過渡期の世代である。「ゾンホの伝統を体現」し、前世代と同様村落レベルで役職についてものがいたことが記されている一方、2人のフランスへの留学者の名が記されている。また、八月革命以降状況に触れ、社における党の幹部になったものとして第六世代2名と第七世代1名の他、衛国団に参加した第六世代10人と第七世代5人がいたことが記されている。

以上が前半部分では、「我々の父祖(cha ông ta)」が主語として使われているのに対し、以下の部分では「我々の子孫(con cháu ta)」という主語が使われるようになる。この新しい家譜の編纂の中心になったのが第七世代であったことは先に述べたが、家譜の記述の中で第六世代と第七世代の間に見られる視点の転換は、この家譜が1990年代に老年期を迎えつつあった第七世代の視点から書かれたものであることを物語っている。

そして、第六世代を記述する段落の終わりでは「我がゾンホの伝統は、特に1954年から今日に至るまで書きつづけることができる。」という一文が置かれ、前文の記述がベトナム北部において本格的に国家建設が始まって以降の時代により重点をおいていることを示している。このゾンホは、科挙登第者や高官を出しておらず、第三世代から第六世代までの記述は非常に簡素なものとなっているのに対し、第七世代以降では、特に戦争に関するものを中心に経歴が大量に記述されることになる。この部分の冒頭では以下のことが書かれている。

> 対米救国戦争が勃発したとき、ND族のゾンホのそれぞれの世代の子孫たちは、祖国を救う道の至るところや、ラオスやカンボジアの国際戦場にいた。我々の子孫たちは、祖国を救うため死を覚悟するという伝統をしばしば維持発揮することができたのである。子孫たちは、故郷・国そしてゾンホのために進んで自分を犠牲にした。

第七世代以降の事跡は、始祖において強調された「国を愛する」という「伝統」に結びつけて解釈されている。そして、アメリカとの戦争で戦死した第七世代の烈士として4人、第八世代に属し中越戦争に参加した士官3人と負傷兵2人、同じく第八

世代に属しカンボジアで烈士となった一人、模範的負傷兵となった第六世代の一人と第七世代の一人の名が記載されている。

次に、南部に住むのゾンホの成員についての記述が続く。このゾンホでは第六世代にサイゴン(現ホーチミン市)に移住した家族があり、現在でも毎年行われるゾンホの命日にはホーチミン市から代表が参加している。この南部に住む第七世代に属する子孫たちの中には、南部がフランスやアメリカの直接・間接の支配を受けていた時代に、フランス・ドイツ・アメリカに留学したもの２名と、中高級士官となって当時の政府から勲章を授与されたもの２名がおり、その名前が記載されている。

記述はこの後北部に戻り、南部と同様北部にも第七世代にロシアに留学したもの１名と中国に留学した者１名がおり、現在二人とも若い社長となっていることが記されている。さらに、第七世代の教育分野で活躍したもの３名、ND族の嫁となって社会文化的分野で活躍した女性６名、合作社や村レベルでの幹部として活躍したものとして第六世代の５名、第七世代の18人、第八世代の３人、第八世代に属し大学以上の学歴を持ち技師や医者になったものとして６人、第八世代に属しヨーロッパに留学しているものとして１人の名前が記載されている。

そして、もう一つ注目すべき点は、これに続くゾンホの成員の事跡を記した最後の部分で、ゾンホに生まれた女性たちの事跡についてまとめて取り上げられていることである。八月革命後に従軍した第六世代の女性３名、第七世代の女性12名、さらにND族における女性の活躍を象徴するものとして、副所長となった第七世代の女性２人の名前が挙げられている。

以上が序文のうちゾンホの成員の事跡を記した部分である。この記述には以下のような幾つかの特徴が見られる。

まず、最後の部分に見られるように、革命以前の家譜ではほとんど記載されることのなかった女性の事跡の記載に特に注意が払われている点である。社会主義が早くから定着を目指した男女平等の理念は、現在も公的な場で形式的には根づいている。特に、女性の事跡の中に名が記されている第七世代を中心とした世代は、現実に女性が国家建設に大量動員された世代にあたりその発言力は無視できないものがある。また、男性専用の場であったところに女性が入ることが可能になっている例は、90年代に復興しつつある他の文化の領域においても観察される[16]。

そしてさらに重要なのは、これらの事跡の中で最も重視されているのが救国戦争への参加者たちだということである。ファムは、一説には800万人と言われる抗米戦争から郷里に戻った帰還兵にアイデンティティの危機に陥ったものが多かったことを指摘している[17]。ND族においてはまさに新しい家譜の編纂に関わった第七世代から第八世代にかけてが、その帰還兵と同世代に当る。

序文に見られるゾンホの伝統とは国家関する物語であるが、必ずしも国家の側からの押し付けを意味するものではない。外国の侵略を防ぐために従軍した人や農村において教育や政治活動に従事した人々そして普通の農民を含めて生産活動に従事した人々は、自分たちの活動が国家の建設と防衛のためのものだったのだという意識を持ち、それぞれのライフヒストリーにおいて欠かせない部分になっている。

しかしまた、この序文は全体においてただ第七世代が壮年期に身につけてた価値観や世界観のみを称揚しているのではない。それを最もよく示すのが、遠くホーチミン市に暮らすゾンホの成員たちに対する評価である。南部のホーチミン市の成員の事跡は、北部のドアイ村に住む第七世代の人々が活躍した体制とは敵対する体制のためのものであった。これに関して、序文では事跡を列挙した部分の後で以下のように述べられている。

> ゾンホの伝統を見直してみると、我々の祖先たちはどのような境遇・社会においても終始一貫しており、国を愛し、道理を愛し、独立と自由を愛する心は依然としてゾンホの貴重な伝統であった。

序文は、革命以前に生きた人々と以降に生きた人々をできるだけ多く取り上げ、始祖から発する「国」「道理」「独立」「自由」といったものを愛するというゾンホの伝統の下に統合しようとしている。そして、それはかつて対立するイデオロギーに奉仕していた家族の成員をもその伝統の中に取り込む形で行われている。ゾンホの活動の復興は、単に家族の過去への関心の寄せ集めではなく、家族間の差異を調停しゾンホ全体の「伝統」へと練り上げていく過程でもありうることを示している。

ND族の家譜の序文の内容は、家族のレベルでのアイデンティティを国家のレベルのアイデンティティに結び付け記憶継承するのに家譜が優れた媒体であり、ゾン

ホが家族と国家を媒介する「伝統」を生み出すのに適切な場たりうることを示す例の一つであるといえる。

終わりに

20世紀後半のベトナムの歴史において社会主義と民族主義は互いに絡み合いながら現在に至っている。しかし、ドイモイ以降、社会主義の側に変化が生じ始めてから、現在から過去を明確に見通せる糸は民族主義だけとなりつつある。ND族で新たに編纂された家譜における国家防衛と建設の物語は、この民族主義の線の上に生起しているものであると考えられる。

そして、この民族主義の糸は未来を見通したものでもある。ND族の例に見たように、現在生起しつつある民族主義な糸は過去におけるイデオロギーの対立を超越したものとなっている。リー朝の王子は朝鮮半島の国家防衛に貢献したのであるにも関わらず、ベトナムでそれが大々的に取り上げられる理由の一つもそこにあると考えられる。国家の持つイデオロギーや理念ではなく、国家という共同体の存在が自明のものとなり、その存続そのものが意味をもっているのである。このことは、国家に対して自立性の強かった革命以前の農村とは異なった文化状況にゾンホがおかれていることを物語っている。

家族や村落といった社会単位において文化政策を背景に行われている近代化と「伝統」の間の調停(あるいは近代化と社会秩序の維持のための「伝統」の利用といったほうがいいかもしれない)とは異なる過程が、ゾンホのレベルで進行していることが考えられる。経済的な基盤を共有せず公的な政治機能も失ってしまっているゾンホは、様々な政策によって近代化を進行させる場とはならないし、共同体の強化という目的にも直接は利用しにくい。しかしながら、デンドーを参拝した高官たちとドァイ村ND族の人々双方にとって、ゾンホは国家という共同体を維持するという民族主義的「伝統」を継承する装置としての役割を持ちうるものであった。

開放政策による韓国との交流の再開、農業生産の基本単位として復活した家族、個人主義に対抗するための古い共同体の要素の利用、「どちらの味方か」より「私は

誰か」という問題への世界的な関心の移行、そして、ゾンホの長老となっていた対米救国戦争世代のＮＤ族第七世代の人々。本論で取り上げたゾンホの活動の復興の背景にあった幾つかの出来事はいずれも90年代に特徴的なものであり、今後のゾンホの活動において採用される価値や形式はさらに変化して行くことが予想される。

しかし、これまで見てきた90年代のゾンホの復興の例において革命以前のゾンホの文化とは決定的に異なり、これからもゾンホの活動において重要性をもつことが考えられる点がある。ＮＤ族の家譜に記された国家の防衛と建設への参加者の大量の記録は、社会主義建設の時代を経てはじめて可能になったということである。

家譜は、書き記されることのできる事跡の面で大衆化している。ＮＤ族の家譜にはベトナムの近代国家建設とともに記載が可能になった事跡が多く記載され、その結果、旧来のベトナムの家譜で個々の祖先についてばらばらに記述されていた事績に一つの統一性が与えられることとなった。このような女性も含めて大衆化した形でゾンホの成員の事跡をたたえる形式は、戦争以外の「文化」と呼ばれる面に重心を移しつつも、今後も採用されていく可能性が大きいと筆者は考える。

ゾンホの活動は、変化の激しい現代の文化状況を巧みに反映しながらこれからも戦略的に構築しなおされていくものであると考えられる。そして、その過程で重要な意味を持ちうるものとして、リー氏、ドン村のゾンホ、ドァイ村のＮＤ族それぞれに見られた国家との関係について引き続き留意する必要があると思われる。

注

(1) 「伝統」の復興の全般的な経緯と状況については、'Vietnamese village : Tradition and revolution'『東アジアの現在—人類学的研究の試み』風響社1997年103～106頁を参照のこと。

(2) 下位リニージを指す言葉には他にいずれもガィンと同様「枝」の意味を持つカィン(cành)やニャィン(nhánh)などがあり、地域によって使われる言葉が違う。本論では、カックニェム周辺で使われていたガィン(ngành)を用いる。

(3) Kim Ngoc Bao Ninh, *Revolution, Politics and Culture in Socialist Vietnam, 1945-1965*, Ph.D. Dissertation (Political Science), Yale University, 1996, pp.319-325.

(4) Shaun Malarney, *Ritual and Revolution in Viet Nam*, Ph.D. Dissertation (Anthropology), The

University of Michigan, 1993, pp.294-298.

(5) *Ibid.*, p.294。ディンは「文化の家」政策が始まる前にフランスとの戦火によって失われた例も多い。

(6) *Xâi dựng văn hóa mới ở nông thôn*[農村における新しい文化の建設], Nxb. Sự Thật, 1980, p. 31-32.

(7) 'Tiếp tục đổi mới và phát triển kinh tế - xã hội nông thôn [農村の経済社会を引き続き刷新し発展させる]', *Nhân Dân* 1993/7/3, số : 13988, tr.3.

(8) 古田元夫『ベトナムの現在』講談社1996年156頁。

(9) 古田、上掲書156頁のほかに、Pham Van Bich, *The Vietnamese Family in Change*, Curzon, 1999, p.95. Bùi Thế Cường, 'Người già ở An Điền và một số đặc điểm nhân khẩu xã hội [アンディェン村の老人と人口・社会的な幾つかの特徴]', *Xã Hội học*, số : 38, tr.17など。

(10) 例えば、桃木至朗「社会主義農村の変化と伝統」『アジア読本　ベトナム』河出書房新社1995年62頁、同書所収の岩井美佐紀「揺れる村人の心」六七－八頁、岩井美左紀「家族と社会主義」『もっと知りたいベトナム　第二版』弘文堂1995年62～８頁など。

(11) Xuân Lương, 'Dòng họ Lý ở Hàn Quốc tìm về nguồn cội [韓国のリー氏のゾンホが発祥の地に帰る]', *Nhân Dân Cuối Tuần*, 1995, số : 16, tr.9, 15.

(12) 韓国のリー氏の末裔の帰郷については上記記事の他に、Lý Xương Căn, 'Vài tư liệu về hoàng tử Lý Long Tường [王子リー・ロン・トゥォンについての資料]', Giáo Dục và Thời Đại, 1995/1/1, số : 1, tr.13、Tuấn Anh, 'Ngàn năm cố quốc [故国千年]', Đại đoàn kết, 1995, số : 45, tr.4、'Chủ tịch UBTW MTTQ Việt Nam Lê Quang Đạo thăm Hàn Quốc [祖国戦線中央委員会レー・クァン・ダオ主席の韓国訪問]', Hà Nội Mới, 1995/10/23, tr.1などに紹介されている。

(13) Lý Hiếu Nghĩa, Tóm tắt lịch sử Triều Lý [歴史要約：リー朝], Ban quản lý di tích lịch sử văn hóa Đền Đô, 1999, tr.1.

(14) ドン村は革命以前の文化的な遺物の少ない村である。同様に1950年代に失われたとされるディンについては、拙著「ホーおじさんを担ぐ」『ベトナムの社会と文化　第二号』風響社2000年241～50頁を参照のこと。

(15) 17世紀前半にすでに子供を持っていた始祖から６代で20世紀前半に至るとは考えにくい。ＮＤ族の家譜にも末成が指摘する中空構造があると考えられる。ベトナムの家譜における中空構造については、末成道男、「ベトナムの父系集団―ハノイ近郊の事例より」、『東洋文化』78号、東京大学東洋文化研究所1998年、49～54頁、末成道男、『ベトナムの祖先祭祀―潮曲の社会生活』風響社1998年、307～308頁を参照のこと。

(16) 例えば、村祭りや葬式などにおいて女性たちが行う儀礼が重要な要素となるなど、革命以前には見られなかったことが行われるようになっている。また、筆者が調査をしていた1999年には、城隍神に対する儀礼が行われる際に、ドン村のディンの代わりをしている建物の中に女性の代表が入って男性の老人たちと会食をすることを女性たち要求し実現された。

(17) Pham, *op.cit.*, pp.88-91.

Revival of lineage activities in the northern part of Vietnam under Doi Moi : Some examples in the Bac Ninh province

Sumimura Yoshinori

This article will discuss the revival of lineage activities in the 1990's in the northern part of Vietnam. After the program of renovation known as Doi Moi was launched, the growing tolerance of the regime on culture has been reflected in the revival of customs that were once abandoned as 'feudal reactionary practices' or superstitions in the 1950's and 60's. Moreover, the regime started using some customs as 'tradition' to strengthen community and the regime itself.

The revival of lineage has been different form the other social units such as families or villages, because there are no clear social and cultural policies on lineage. So many researchers have connected the revival of lineage activities with the revival of family as a basic unit of agricultural production in the 1980's. However, it is necessary yet not enough to explain the revival of lineage activities. Lineages not only restore their mutual aid network, but also reconstruct their identity. They are not medleys of families.

The author did fieldwork in Bac Ninh province from 1998 to 1999. After explaining the outline of the lineage and the features of the situation surrounding it, some examples collected in Bac Ninh province will be used to explain the revival of lineage activities more concretely.

First to be discussed is an event in which descendants of Ly Long Tuong, a prince of Ly dynasty (1009-1225) who sought refuge in Korea, returned to Vietnam and visited the shrine for 8 kings of Ly dynasty. This event symbolizes the cultural situation surrounding the linage in the 1990's and also had some influence on the revival of ordinary lineage activities in the commune, Khac Niem, where the author did fieldwork.

Second to be mentioned is the example of *gia pha*, a family genealogy book that was edited in 1993. Through that example, it will be argued that gia pha can be used as a medium to invent, record and succeed the tradition of patriotism in the cultural context in Doi Moi era.

The revival of lineage activities is not a reappearance of pre-revolutionary culture. It reflects the cultural situation of the 1990's, and it is not a result of any policy but of the people's strategy to reconstruct their identity connected with nation.

付表：ＮＤ族家譜(1993年版)「一族総合小史」　単位(人)

	第六世代	第七世代	第八世代	第九世代
計	81	144	228	60
男	37	75	123	18
女	44	69	105	42
抗仏従軍	7	5	0	–
抗米従軍	0	23	6	–
抗中従軍	0	12	20	–
共産党員	4	14	3	–
団員	4	24	35	–
戦傷兵	1	2	0	–
烈士	0	4	1	–
[文化]				
小学校卒	5	134	135	–
中学校卒	0	7	25	–
大学卒	0	3	18	–
恩給幹部	3	3	2	–
出張幹部	0	14	0	–
地方幹部	2	15	2	–
党幹部	1	1	0	–
団幹部	0	5	2	–
軍士官	2	2	3	–
寿(60～70歳)	5	9	–	–
寿(71～80歳)	9	0	–	–